

論語教室だより

『寺子屋・こども論語塾』世話人会

第 96 号

2019 (平成31) 年4月20日 (土)

そどく こ たち みずか まな ちから そだ そじ きた ば 素読は子ども達が自ら学ぶ力を育てる素地を鍛える場

もと とうきょうとしじゅくこうし もん ま まさ ひろ
元：東京都私塾講師 門間 正博

ほっかいこうとうがっこうだい き そつぎょうせい だい がくねん だい がくねんたんにん につた おさむ せんせい
(北海高等学校第45期卒業生 / 第2学年、第3学年担任 新田 修 先生)

とびら あ きよしつ はい はい よ しせい ただ そう い たんにん こ たち まえ た
扉を開け教室に入る。「はい、読むよ。姿勢を正して」そう言って担任する子ども達の前に立つ。
せんせい あと つづ よ し たま こうげんれいしよく すく じん こ たち つづ し のたま
「先生の後に続いて読みなさい。『子曰わく、巧言令色、鮮なし仁』はい!」子ども達が続く。『子曰
わく、巧言令色、鮮なし仁』と。

まいあさ わずか ふん おんし につたせんせい ちよしよ いっぺん えら そどく い み
毎朝、僅か5分ほどのことである。恩師：新田先生の著書から一篇ずつ選び素読をさせる。意味は
おし 教えない。

しょうがくせい ろんご そどく ちゅうちよ い み わ 分からないのに、ただ読ませる
小学生に『論語』の素読をさせることに躊躇はあった。「意味も分からないのに、ただ読ませる
だけで良いものだろうか」と。

これはきゆうであつた。子ども達は素読を好んだ。朝の時間に素読をやらないとリクエストが出る
のである。「先生、今日はやらないの?!」と。

そんなある日、私は次を読んだ。『子曰わく、徳は孤ならず、必ず鄰有り』。私が大きな挫折を
あじ 味わった時、新田先生がくださったお葉書に書いてあった句である。数日後、ある子から突然質問を
う 受けた。「先生、これどういう意味ですか?」と。今まで一度も意味を教えていないが、素読を続
けているうちに意味を知りたくなつたのだ。新田先生からいただいた葉書を見せた。その子はひと
こと 友達を大切にしまさうってことなのかなあ。子どもが自ら学ぶ姿を見た瞬間であつた。

言葉や言い伝えの意味を教えることは大切です。ネット社会で生きる子ども達にとってスピード
や効率の大切さを学ばせることも大切です。しかし、それら要素の弱い「素読」という学び方は子
ども達の自ら学ぼうとする力を育む大切な場だと思ひます。そして、素読は効率良く学ぶための
素地を育てる大切な学習方法だと思ひます。

子ども達の前に立つ時、頭の中には我が恩師：新田修先生のお姿があります。北海高校2年、3年
と担任していただいた新田先生。27年前の恩師の姿は27年後の今、塾講師となつた私の頭の中
にも強く残つています。

【老師の呟き】

ばんカラな連中が結構いた男子校時代の北海高校の卒業生で、3年間卓球部に所属し、3年次には主将を務め
た彼が書いた文章だが、万感胸に迫るものがある。小学校教師を志し、数年を費やして教員採用試験に
見事合格し、歩み始めたその年に病に倒れ、翌年退職して札幌に戻つてくることになる。そこから苦難の人生が
始まるのである。

再び教壇に立つことが叶つたそんな折、拙著の「日に日に新たに亦楽しからずや」と出会つて、始業前の数分間
を使って子供達に論語の素読を指導しているという。その素読を通して子供達が自ら学ぼうとする力を育みつ
つあるという手応えを感じたというのだ。私にとってこれに勝る喜びはないのである。